

〈研究論文〉

地域における子育て支援サークルの活動特性

——「社会サービス」提供主体の視点から——

渡 辺 恵

地域における子育て支援サークルの活動特性

——「社会サービス」提供主体の視点から——

渡 辺 恵

1. 研究の目的と課題

本研究の目的は、多元的にして多様なものとなりつつある今日の地域社会における子育て支援を俯瞰的に捉えようとするところである。

これまで子育ては私的な問題として捉えられ、基本的には家族が行うものとされてきた。そして、その支援は親族や近隣住民などインフォーマルな関係によるもので事足りるとされてきた。むしろ、行政も支援を行っていたが、その範囲はインフォーマルな関係による支援の不足を補う程度に止まっていた。しかし、近年、こうした状況が変わりつつある。核家族化や地域の人間関係の希薄化から、子育て中の親が育児に関する不安やストレスを抱え込むケースが増えてきた。共働き家族の増加によって、子育てと仕事の両立に困難を抱えるケースも目立ってきた。社会全体の少子化も取り沙汰されている。これらのことを背景に、「子どもを産み・育てやすい環境づくり」が模索され始めている。子育て支援が問題を抱える親や子のみならず、すべての親や子を対象にしたものに広がると同時に、それを社会全体で担っていかうという動きが強まってきているのである。

そうした中で注目されるのが、地域における子育て支援である。それぞれの地域において、様々な子育て支援が展開され始めている。例えば、1980年代に入る頃からボランティアなサークルが、子育てについての学習の機会や親子で遊ぶ機会を提供し始め、今日に至っている（白石 1997, 木脇 1998）。行政では、1994年の「エンゼルプラン：今後の子育て支援のための基

本的方向について」（文部・厚生・労働・建設四大臣合意）を受け、95年以降、各市町村で児童育成計画が策定され、そのもとで多様な子育て支援が展開されてきている。加えて民間でも、育児情報誌の発行や託児サービスの提供など、それぞれの地域において多様な形の支援が始まっている。このように、子育て支援は、それぞれの地域において様々な担い手によって多元的に、しかも様々な形で展開され始めているのである。

ところで、このような多元的にして多様な地域の子育て支援を捉えていくためには、それを俯瞰的にみる視点が必要である。その視点として有効なのが、「社会サービス (social services)」である。「社会サービス」は、「社会福祉辞典」によれば、「広義では (複数形)、社会保障・医療・公衆衛生・教育・住宅などを含む生活関連の公共施策全体を意味して使われ、狭義では (単数形) 社会福祉を意味して使われる。この場合の社会福祉は事業や活動に焦点づけていることが多いので、ソーシャルワーク (social work) と変わらない」(真田 2002, 348頁) と定義されている¹⁾。また武川 (1999a/1999b) は、社会サービスを、人々の生活にとって必要な財やサービスのうち、政府がその供給に大きく関与している一連のサービスと定義づけている。これは、『社会福祉辞典』の広義の意味とほぼ同じ捉え方である。その上で、武川は、社会サービスの供給における責任主体は政府であるが、実際の供給主体には、政府のみならず、家族、企業、民間非営利組織などの多様な諸主体が含まれると捉えている。つまり、社会サービスとは、多様、かつ多元的な担い手によって供給される

様々なサービスをひとつの集合体として捉える概念である。この点を踏まえると、先に述べたような今日の地域における子育て支援は、まさしく「社会サービス」として捉えることが可能である。同時に、「社会サービス」の視点からそれを見ることは、地域の子育て支援の現状を俯瞰的に捉え、分析する上で有効であると思われる。

では、社会サービスの視点から地域における子育て支援を見ることにより、どのような研究の課題が浮かび上がってくるのだろうか。この点に関しては、社会サービスの視点から福祉社会を論じた研究が手がかりとなる。武川(1999b)は、社会サービスの視点から福祉社会を論ずる場合、「供給体制の構造」を明らかにすることが重要な課題になると述べている。社会サービスとは、先にも述べたように、多様な担い手によって多元的に供給される様々なサービスをひとつの集合体として捉えようという概念である。であれば、どのような諸主体がどのような、また、どのようにサービスの供給に関わっているのか、さらには諸主体が関わることで、全体としてどのようなサービス供給の布置状況が出現しているのかを問うことが、「供給体制の構造」の解明につながる。先に指摘したように、子育て支援は武川が論じた福祉社会を成り立たせる一要素である。この点を踏まえれば、地域における子育て支援の研究においても、同様にこの課題は重要な意味をもって来る。つまり、地域における子育て支援についての「供給体制の構造」を明らかにすること、換言すれば、子育て支援に関わる諸主体のサービス提供上の特性を調べ、地域社会における子育て支援サービスの布置状況を解明すること、その点が研究の課題となる。

なお、この点に関わって付言しておく、「供給体制の構造」の解明において問われるのは、供給主体の「ポジショニング (positioning: 位置づけ・位置取り)」である。供給主体のポジショニングを把握するときに手がかりとなるのが、社会サービスに関わる担い手の区分である。この点に関して、Evers, A. (1995) や Pestoff, V.

A. (1992) は、社会サービスの「供給体制の構造」を論ずる際に、供給主体を大きく4つのセクターに区分している。第一は、政府や地方公共団体からなる「国家セクター」であり、第二は、民間営利企業を中心とした「市場セクター」である。第三が、ボランティアなグループや民間非営利組織、協同組合などの「サード・セクター」である(ここでの「サード」とは国家でも、市場でもない「第三の担い手」という意味である)。そして、第四は、家族・親族、近隣の親しい者や友人などからなる「インフォーマル・セクター」あるいは「コミュニティ・セクター」である。なお、ここでは、Evers, A. や Pestoff, V. A. に依りつつも、地域における子育て支援の供給主体の次元に合わせ、かつ各セクターの特徴がより現れるように、この4つを「公的セクター」「民間営利セクター」「サード・セクター」「インフォーマル・セクター」と便宜的に表記しておく⁹⁾。この点を考慮すると、当面の課題は、地域における子育て支援サービスに関わる4つのセクターが、提供しているサービスの態様からみて、それぞれ、どのような特性をもち、地域社会にどのように位置づいているのか、そして全体としてどのようなサービスの布置状況を形づくっているのか、を明らかにすることになる。

また、この4つのセクターを手がかりにして、地域における子育て支援サービスの「供給体制の構造」を捉えると、もうひとつの重要な研究課題が浮き上がってくる。それは、各セクター内における個々の子育て支援の担い手のポジショニングの問題である。地域の子育て支援サービスは、先にあげた四つのセクターによって担われている点で多元化していると同時に、各セクターの内部においても様々な供給主体によって担われ、多元化している。したがって、そうしたセクター内の様々な主体に焦点を当て、諸主体がそれぞれどのような特性をもち、そして各々、どのような位置を占めているか(ポジショニング)を明らかにし、その上で、セクター内部におけるサービス提供の布置状況を明らかにすることが、いまひとつの重要な当面

の課題となるのである。

次に、このような課題の解明を目指す本研究の対象について触れておきたい。上記の課題からすれば、本来この研究は、4つのセクターすべてを網羅しつつ、かつ、その内部にまで立ち入って行くべきものである。その場合の研究対象は、4つのセクターに属する子育て支援の主体すべてである。しかし、これは實際上、極めて困難な試みである。ひとつの研究で解明可能な範囲をはるかに越えてしまう。そこで、本研究では、対象を、地域の「子育てサークル」を含む「子育て支援サークル」⁶⁾に限定して研究を進めることとする。

なお、ここで、子育て支援サークルに焦点を当てるのは、次の2つの理由からである。第一の理由は、子育て支援サークルはサード・セクターに位置づく供給主体であり、その点で、子育て支援に関わるサービスの「供給体制の構造」を解き明かす際に欠かせない存在であるという点である。サード・セクターは、他のセクターとの重なり合いや関係において重要な位置を占めている。子育て支援サークルも、サード・セクターに位置する団体として他のセクターと密接な関係をもっており、その分、子育て支援に関わるサービスの「供給体制の構造」解明において重要な意味をもっている。さらに、子育て支援サークルは、サード・セクターに位置する団体として多様性を帯びている。サービス供給主体の多様性という点でも、この種のサークルを対象として、各サークルのポジショニングの研究を行うことには大きな意義があると考えられる。加えて、これまでの研究では、この点の解明がほとんどなされていない。先行する研究は、個別のサークルに関するケース・スタディ(石原 1999)や、サークル全般の概括的な研究(子育てサークル研究会 2001)が中心であり、研究の視野の中に「地域」が入っていない。しかも、サークルに参加する人々の意識に焦点を当てた研究(学坂・松原 2001や小栗 2001)が多く、サークルそのものの位置づけを、地域社会において問うという視点をとっていない。こうしたこともあり、本研究では、地域に所在

する子育て支援サークルに焦点を当てたのである。

第二の理由は、地域における子育て支援サービスの担い手のうち、子育て支援サークルに対する社会的な期待が強いことである。子育て支援サークルは、1970年代半ば頃に大都市やその周辺で結成されはじめ、80年代には全国的に広がり、近年ますます増えている(木脇 1998)。また、行政においても、子育て支援サークルの形成・活動を支援する施策が進められている(中野 2001)。加えて、子育て支援サークルの支援は、子育ての当事者あるいは子育ての先輩から提供される身近な支援であることから、子育てに携わる者の悩みや不安、孤立の解消に役立ち、結果的に子育ての問題の抑制につながっているとも言われている(白石 1997)。子育て支援サークルに関しては、数の上で増えつつあるだけでなく、その社会的意義が認められ、期待も高まってきており、その点でこうしたサークルを対象に研究することには意義があるものと思われる。

改めて研究の課題を示しておこう。本研究の課題は、「サード・セクター」に属する地域の子育て支援サークル(以下、適宜、「サークル」と略記する)を対象に、それぞれのサークルが提供しているサービスの点からその活動の特性を調べることで、ひとつには、地域における子育て支援におけるこの種のサークルの位置づけを明らかにすることである。二つには、個々のサークルに焦点を当て、セクター内におけるそれぞれの位置づけを明らかにすることである⁶⁾。

2. 研究の方法と調査の概要

次に本研究の方法について触れておこう。本研究では、上記の課題を明らかにするために、X市において市民主導で活動している子育て支援サークルを対象に、以下の2つの調査を実施し、同時に関係資料を収集した⁶⁾。まずひとつは、28サークルに対する質問紙調査(2001年11月～2002年8月の間に随時実施)である。調査対象のサークルは、就学前の子育てに関する支援を行っているサークルに限定し、市の広報誌、

民間情報誌、公民館・児童館・図書館の施設利用団体からの情報などをもとに把握し、決定した⁶⁹。2つめの調査は、上記のサークルのうち承諾が得られた20サークルの代表者等に対する聞き取り調査（2002年3月～9月に実施）である。質問紙調査では、サークル発足年、発足の契機、目的、活動や運営方法等、主にサークルの概要を尋ね、聞き取り調査では、発足時の様子、その後の経過、活動や運営の実際・背景等、主にサービス提供活動に関わる事項を質問した。調査対象であるX市の子育て支援サークルの概要は表1に示す通りである。

調査対象地域であるX市は、人口約19万人（2002年10月現在）の中規模都市である。X市は、農業を中心としていた旧地区と、1970年以降、政府及び民間の研究機関等が設立され、形成された新地区の2つの地区から構成されるという特徴をもっている。X市の就学前児童を持つ世帯構成は、1997年に実施された実態調査によれば⁷⁰、核家族世帯が約7割であり、三世帯世帯が27%である。また、「両親以外に子供の世話ができる人がいない」とする家族が68%であり、近所づきあいでは「あいさつをする程度」と回答した家族がほぼ半数である。このことを踏まえ、X市はインフォーマルな関係による子育て支援が提供されにくい地域であると言える。ちなみに同調査によれば、就学前児童を持つ親の就労状況は母親が39%（うち常勤が20%、非常勤が18%）、父親が97%である。

調査対象である子育て支援サークルはほとんどが新地区で活動している。これには、転勤による転入・転出が多く、インフォーマルな支援が不足しがちであること、研究機関等に勤める高学歴層の親が多く、概して子育てや教育に熱心であることが関係していると思われる。このように、この地域は親の学歴階層や教育意識の点で偏っており、研究対象として取り上げるには、若干問題ではある。しかし、反面、子育て支援のサークル活動が熱心に行われ、その活動も多様性に富んでいる点で、この種の研究を行うには好条件である。

3. X市の子育て支援におけるサークル全体のポジショニング

社会サービスの視点からX市における子育て支援全体を俯瞰したとき、サード・セクターとしての子育て支援サークルは、全体としてどこに位置しているのだろうか。このことを明らかにするために、公的セクターによる支援との相対的關係に着目しつつ、各ケース（表1）を概観した。以下、提供するサービスの対象、目的、方法からみた場合の、サークル全体の特性、ポジショニングである。

①主に専業主婦である親とその子を支援の対象としていること

X市では、就業している親に対するサービスが、23の公立保育所や子育てサポートセンターを通じて行われている。この点で就業している親に対するサービスについては、公的セクターによるところが大きくなっている⁷¹。ちなみに、平成15年12月現在のX市の保育所入所状況の統計によれば、公立保育所における待機児童数はゼロである。

むしろX市における公的セクターのサービスは、就業している親に対するサービスに限られるものではない。地域子育て支援センターが実施する事業や教育委員会が実施する乳幼児家庭教育学級など、専業主婦である親を対象にして公的セクターが行うサービスも存在している。ただ、こうしたサービスでは、対象となる人の数や期間が制限されている。例えば、X市の乳幼児家庭教育学級では、受講期間は原則的には6ヶ月間の1回限りであり、1学級あたりの定員も親子35組程度に決まっている。この点で、公的セクターのサービスは、専業主婦である親のニーズを十分に満たしきれていないと推測される。

X市において専業主婦である親のニーズに対応しているのが、ここで取り上げているサークルである。サービスの対象に着目すると、サークルは主に専業主婦である親とその子を対象にサービスを提供している。例えば、28のサークルのうち、17が定期的な活動を平日の昼間に行っている。このことから、サークルのサービス

表1 調査対象であるX市子育て支援サークルの概要

ケース	設立年	活動拠点	人数	目的(質問紙調査及び聞き取り調査の回答から抜粋)	主な活動内容 (子どもの対象年齢)
1	1997	児童館	親子:37組	同じくらいの子ども同士で遊ばせることによる刺激, 母親同士の交流の場。	親子遊び(1, 2歳児)
2*	不明	児童館	親子:48組	母親の友達作りと, 子どもたちが安心して遊べること。	親子遊び(3, 4歳児)
3	不明	児童館	親子:34組	子どもの友達作り及び活動を通じて個性を伸ばすこと。親にとっては子育ての学習。	親子遊び(3, 4歳児)
4	1991	児童館	親子:32組	母子共に友達を作るところ。	親子遊び(3, 4歳児)
5	不明	児童館	親子:57人	子どもたちの健全育成。	親子遊び(1, 2歳児)
6	不明	公民館	親子:30組	3才児の子を持つ同世代の親子交流。	親子遊び(2歳児)
7*	1995	公園	15家族	遊びを通して, 視野の広さや他人を認め合う心が育まれること。	外遊び(就園前)
8*	1999	公園	親子:30人	親が子育てに関わること, 子どもに友達と夢中になれる楽しさを伝えること。	わらべうた遊びなどの外遊び(幼稚園児)
9*	1999	児童館	20人	子育て中の母親が体操を通じて, リフレッシュすること。	体操(子育て中の親)
10*	1995	公民館	親子:50組	運動遊びを通じて, 親子で, 子ども同士, 親同士でふれあえる「タッチ」の場を作ること。	体操(2, 3歳児)
11*	1998	公民館	親子:22組	親子で楽しく体を動かすこと。	体操(幼稚園児)
12	1997	児童館	親子:60人	親子のふれあいと, 母親同士の交流。	エアロビクス
13	1996	公民館	40人	国際語として英語を学ぶこと。	英会話(幼児~小4)
14*	2000	公民館	親子:5組	小さい頃から英語に親しむことで英語嫌いにならないようにすること。	英会話(就園前)
15*	1987	自宅/公園	40世帯	マニュアルや専門家任せの子育ての現状を変えようと思いはじめる。異年齢集団での遊びや野外遊び, 親同士の預け合いを通じて, 親と子が共に育ち合えるようにし, 子育ての輪をつくること。	自主保育(就学前)
16*	1987	自宅	3人	パネルシアターにふれあい, 楽しんでもらうこと。パネルシアターの作成し, 活用してもらうこと。	保育所, 幼稚園等でパネルシアター
17*	1998	児童館	7人	パネルシアターの楽しさを知ってもらうこと。	児童館等でパネルシアター
18*	1985	図書館内相室	8人	自分たちの学びの場。自分たちの出来る範囲での社会参加。	幼稚園, 図書館等で素話
19*	1981	企業	7人	子どもたちに生の声で「お話」を届けること。豊かな心が育つようにすること。	幼稚園, 小学校等で素話
20*	1985	公民館	14人	「お話は心の栄養」。子ども的人格形成の大切な時期に, 心が育っていくために生の声でお話を語ること。	幼稚園, 保育所, 病院等で素話
21*	1993	児童館	6人	お話を通して地域の子どもたちに, 現実の世界からお話の世界へはいることで, ほっと一息つけるような時間が共有できること。	児童館, 図書館等で素話
22*	1989	老人福祉センター	24人	おもちゃを通して子供同士のふれあい, 親子のふれあいの場になること。手作りおもちゃやおもちゃの修理により, 遊び道具を大事にする心を育てること。	おもちゃの貸出/おもちゃで遊べる場の提供
23*	2001	公園	主催者1名	公園に集まってくる親と子どもが一緒に楽しみ, 遊びを通して親子間, 親同士コミュニケーションがとれたら...	わらべうた遊び・草花遊び(就園前)
24*	2001	公園	主催者1名	子どもに, 日常の様々な経験を通し, 社会性などを身につけること。	自然・季節遊び(就学前)
25*	1987	児童館	10人	子どもたちに絵本のおもしろさを伝え, 母親に絵本の紹介をすること。活動を通じて地域に顔見知りの人をつくること。	読み聞かせ・手遊び
26*	1999	公民館	主催者2名	子育て中の母親たちがおしゃべりを楽しむことで心身のリフレッシュの場になること。新しく越してきた人が地域に馴染めるような場をつくること。	母親同士の交流・情報交換
27*	1999	公民館	40人	「子どもがいるからできる」というスタンスのもと, 子育て中の母親たちが育児を楽しめるように同じ立場の母親たちをサポートすること。転動でくる家族が多いX市で, 地域の中に豊かな人間関係を築くこと。	育児情報誌・イベント企画
28	2002	公園	35世帯	遊びを人と人とのつながりと考え, より豊かな遊びの環境をつくること。子どもたちの生活に遊びを取り戻すために, 実際に体を動かして遊ぶ楽しさを伝えること。	子どもの遊びを考えるワークショップや遊びの広場の開催等

注) *は, 聞き取り調査を行ったサークル

の対象は、専業主婦である親とその子に限られていると推測される。逆に言えば、そこでは就業している親がサービスの対象として想定されていない。

これらを踏まえると、X市の子育て支援全体では、公的セクターが働く親のニーズを満たし、サークルが専業主婦である親のニーズを満たすという形になっていると考えられる。公的セクターとサード・セクターが、各々、サービスの対象をめぐる独自の位置を確保し、サークルは専業主婦である親を対象とするサービスに傾斜しているものと思われる。

②主に支援の目的として子どもの教育もしくは親自身の学習を志向していること

サービスの目的に着目すると、X市のサークルでは、教育・学習志向が強くなっている。親子遊びを提供しているサークル（表1に示すケース7。以下同）は、質問紙調査における活動目的に関する質問に、「公園遊び、児童館での遊びを通して、いろんな人（大人・子ども）がいるのだという視野の広さや他人を認め合う心が育まればよいと思います」と回答している。また、素話を子どもたちに提供しているサークル（ケース20）の回答は、「子どもの人格形成の大切な時期に心が育っていくために生の声でお話を語ること」となっている。このように、X市のサークルには、親子のふれあいや他の親子との交流、読み聞かせ等の文化体験を通して、子どもと親、両方の成長を促すものが多くなっている。

一方、保育所や保健所、地域子育て支援センターなど、X市における公的セクターでは、親の就労を助ける保育や乳幼児健康診断、子育ての悩み相談など、社会福祉的な目的を持つサービスがより多く提供されている。こうしたことから、X市の子育て支援では、公的セクターが主に社会福祉を保障する役割を担い、サークルは教育・学習を促す役割を担っているものと思われる。

③支援の方法が主に「場」の設定に傾斜していること

最後に、サービスの方法に着目した際のサー

クルの特性を検討する。X市の公的セクターによるサービスは、基本的には、保育士や保健師などの専門家によるものであり、その専門性を活かすことに力点が置かれている。それに対して、サークルのサービスは、「場」の設定に力点がおかれている。専門家の専門性を後ろだてにサービス内容の高度化を図ることよりもむしろ、人々が「仲間づくり」できる「場」の拡大に重点が置かれている。

この点について、聞き取り調査の結果を示しておこう。例えば、体操を提供しているサークル（ケース10）の元代表Hさんは「体操そのものというよりも、親子ともに友だちをつくりたいという動機でみんな参加している」と話している[2002年6月28日実施の聞き取り調査。以下調査実施日のみ記載]。また、外遊びを提供しているサークル（ケース8）の代表Yさんは、同じ公園で普段はバラバラに遊んでいる親子と、「せっかくだから週1回は、みんなで盛り上がりとう」ということでサークルを立ちあげたと話している[2002.07.31]。このように、サークルでは、日にちと時間帯を決め、親子が集まりやすい「場」をつくり出すことに力点が置かれている。そしてそこでは、参加者が「仲間」となり、共同して互いのためになるサービスをつくり出し、それを互いに享受し合うことが行われている。「仲間づくり」、換言すれば「共同性の創出」につながる「場」の設定が、サークルのサービス提供の重要な方法のひとつになっていたのである。

以上の調査の結果からみて、X市の子育て支援サークルは、同市における子育て支援サービス全体のなかで、主に専業主婦である親を対象に、子どもと親の両者の成長を促す教育・学習援助の役割を果たしていることが明らかになった。加えて、この種のサークルでは、支援の方法が「場」の設定に傾斜し、その点で「共同性の創出」の契機を孕むものとなっていた。ちなみに、「共同性」は、インフォーマル・セクターによるサービスの特徴でもある。このことから、サークルの位置は、就業している親を対象に、福祉的なサービスを専門性に基づきつつ提供す

る公的セクターと対比的なところに所在すると言える。そしてその位置は、共同性を軸に据えたインフォーマル・セクターに接続する。

4. サービスの志向性とサークルのセクター内のポジショニング

次に、セクター内における個々の子育て支援サークルの活動特性とポジショニングを明らかにしてやることにする。この点を明らかにするためには、まず、サークルの活動特性を把握するための枠組みが必要であろう。木脇（1998）によれば、サービスの提供も含めてサークルが行う活動は、誰に対し、どのような目的で、どのように行うかという点で多様化してきていると言う。ここでは、こうした知見を踏まえて、サービスの対象、目的、方法に着目して聞き取り調査の結果を整理し、サークルが提供するサービスの志向性、すなわち、提供するサービスがどのような方向を向いたものであるかを明らかにしておく。

4-1. サービスの志向性

①対内志向／対外志向

まずは、サービスの対象に着目したときの志向性である。聞き取り調査では、サークル内のメンバーのみにサービスを提供しているケースと、サークルのメンバー以外の人々にもサービスを提供しているものが見られた。この点において、子育て支援サークルの提供するサービスは、「対内志向」と「対外志向」に分けることができそうである。

②自己充足志向／社会効果志向

第二は、サービスの目的に着目したときの志向性である。聞き取り調査では、サービスを提供することで子育てに関する社会的課題の解決を図ろうとするケースが見られた。社会的な効果を志向するサービスの提供である。一方、聞き取り調査では、サービスの目的を、メンバー自身のニーズの充足、自己表現におくケースが見て取れた。このケースの場合、「サービス」といっても誰か他の人のためにするサービスではない。「サービス」をすること自体が、提供者で

ある自身の満足につながるといったケースである。このことから、サービスの目的に着目したとき、子育て支援サークルの提供するサービスは、「社会効果志向」と「自己充足志向」に分けられそうである。

③協同産出志向／個別供給志向

次は、サービスの方法に着目したときの整理である。聞き取り調査では、サークルに集まる人々が活動を通じて、サービスを協同で作っているケースが見て取れた。一方、サークル外の専門的な能力を持つ人にサービスを任せているケースや、メンバーの個人的な資質・能力に依拠してサービスを提供しているケースも見出せた。この点で、子育て支援サークルが提供しているサービスは、「個別供給志向」と「協同産出志向」とに区別できそうである。

以上、聞き取り調査の結果をもとに、サークルが提供するサービスの志向性を浮かび上がらせてみた。子育て支援サークルに関するこれまでの研究では、サークルを類型化することで、その特性を捉える試みがなされている（白石 1997、木脇 1998）。この試みにおいて木脇（1998）はサークルをその目的に着目して類型化、それが社会変革を目指すものから親自身の気晴らしを目的とするものまで広がっていることを明らかにした。このことは、先に示したサービスの志向性で言えば、「自己充足志向」か「社会効果志向」かに該当する。

また、白石（1997）は、サークルを活動の方法に着目して類型化、メンバーの当番制によるものと専門的にサービス提供を行う人々への依頼によるものがあることを指摘した。この分け方は、サービスの志向性に照らせば、「協同産出志向」か「個別供給志向」かに相当する。さらに、ボランティア組織一般に関する研究ではあるが、国尾（1999）は、ボランティア組織には、サービス提供が内部のメンバーを対象にしたものからメンバー外の人々を対象にしたものまであることを指摘している。この知見は、本研究で言えば、「対内志向」と「対外志向」に当たっている。このように、先行研究の知見に照らしてみても、先に示した「サービスの志向性」は、

サークルの活動の特性を把握するためのものとして妥当であると思われるのである。

4-2. サービスの志向性によるサークルの整理と各類型の活動特性

上記の枠組みによって調査対象の子育て支援サークルを整理し、その結果をもとに、X市における子育て支援サークルの活動特性を、その属するセクター内で探ることとする。

表2は、上述の3つの志向性を組み合わせ、その組み合わせと調査で把握した各サークルの活動を突き合わせつつ、事例を幾つかの群に整理したものである。事例群に空欄があるのは、先に示したように調査の結果を整理するなかで、まずもってサークルが提供しているサービスの志向性を抽出、一方でそれを論理的に組み合わせて仮の群を想定すると同時に、また、一方で実際の事例を経験的に群として取りまとめ、論理と経験を相互に突き合わせるなかで両者が相応する場合のみを最終的な「事例群」として抽出したためである。そこでは、当然ながら論理的に想定される群が、実際には事例として見出せない場合もある。表に空欄があるのは、そのためである。

以下、このようにして整理したサークルの群について、それぞれその活動特性を見ていくことにする。なお、ケースのナンバーは、サークルの概要を示した表1に対応する。

*第1群（ケース1～8）：「交流提供型」

ひとつめの群は、提供するサービスが、対内志向、自己充足志向、協同産出志向に傾斜している群である。サービスの対象について言えば、この群のサークルでは、会員制をとり、会費を集め、会員に対してのみ、サービスの提供が行われている。対内志向が、その特徴である。また、サービスの目的では、ケース1のサークルが「同じくらいの子どもを共に遊ばせることでよい刺激となり、また、母親同士の交流の場になること」と回答しているように、この群のサークルは、子どもも含めてメンバー同士が知り合い・友人になること目指している。つまり、自己充足志向である。では、その活動の方法はどうか。今も紹介したように、仲間づくりを目的としたこの群の活動方法は、中には月当番制の形態を取るものもあるが、大方においてメンバーがその「場」で協同して活動を企画・運営する形をとっている。協同産出を志向しているのがこの群のサークルである。

表2 サービスにおける志向性と事例群

対外	目的	方法	事例群
対内志向	自己充足志向	協同産出志向	①交流提供型
		協同産出志向／個別供給志向混合	
		個別供給志向	②教室提供型
	自己充足／社会効果混合志向	協同産出志向	
		協同産出志向／個別供給志向混合	
		個別供給志向	
社会効果志向	協同産出志向		
	協同産出志向／個別供給志向混合	③教育主張型	
	個別供給志向		
対外志向	自己充足志向	協同産出志向	
		協同産出志向／個別供給志向混合	
		個別供給志向	
	自己充足／社会効果混合志向	協同産出志向	
		協同産出志向／個別供給志向混合	
		個別供給志向	④文化経験提供型
	社会効果志向	協同産出志向	⑤きっかけ提供型
		協同産出志向／個別供給志向混合	⑥ライフスタイル提案型
		個別供給志向	

こうした特徴を持つこの群では、メンバーである親と子の仲間づくりが目指されており、活動の内容では親子が交流できる遊びに力点がおかれている。そこで、この群のサークルを「交流提供型」と呼んでおく。

***第2群（ケース9～14）：「教室提供型」**

2つめの群は、提供するサービスが対内志向、自己充足志向、個別供給志向である群である。この群では、サービスを享受できるのがメンバーのみに限られている点で第1群と同様、対内志向である。また、サービスの目的に着目すると、この群のサークルは自身や我が子の学習ニーズを満たすことを目的としており、その点で自己充足志向である。具体的には、自身と我が子が、自分たちのために英語や体操を学ぶ場としてサークルをつくり、活動している。このように、この群は、対内志向で自己充足志向である点において、第1群と同様である。ただ、この群においては、自分たちの学習ニーズを満たすために、専門家にサービスの提供を頼んでいる。具体的に言えば、この群のサークルでは、メンバーは場所の確保や日程の調整だけを行い、具体的な活動は専門家である講師に依頼し、その人に任せている。その点で、サービスの方法は、個別供給志向である。

こうした特徴を踏まえると、この群の典型は、特定の学習活動に関心を持つ親たちがそのニーズを満たすためにつくる学習教室である。そこで、この群を「教室提供型」と呼ぶ。

***第3群（ケース15）：「教育主張型」**

3つめは、サービスが対内志向、社会効果志向、個別供給志向／協同産出志向混合である場合（ケース15のみ）である。ケース15のサークルは、保育所や幼稚園などで専門家任せになる子育てに対抗し、新たな子育ての在り方を模索しているサークルである。具体的には、親の保育参加や親同士の子どもの預け合いなどを通じて親と子が共に育ちあう子育ての輪をつくることを目指している。この点でこのサークルは、目的において社会効果志向である。このサークルでは、こうした新たな子育てを目指す活動を行うために、サークルの目的を理解し、それに

賛同する人のみをサークルのメンバーとしている。サークルに参加し、サービスを享受できる人はメンバーに限られ、その点でこのサークルは対内サービス志向である。また、このサークルでは、スタッフによる専門的な保育サービスのみならず、同時に、親自身が保育に参加し、サービスを提供する方法をとっている。親は、共に子育てのあり方を考えていけるようにサークルのミーティングに参加し、保育方針を決めることにも携わっている。この点で、このサークルは、サービスの方法としては、個別供給志向と協同産出志向を併せもっている。

こうした特徴をもつこのサークルは、サークルとして一丸となって望ましい子育てのあり方を社会に向けて主張している。そこで、このサークルを「教育主張型」と呼んでおく。

***第4群（ケース16～22）：「文化経験提供型」**

4つめの群は、サービスが対外志向、個別供給志向、自己充足志向／社会効果志向混合であるサークルである。まず、サービスの対象に着目すると、この群のサークルは、保育所や幼稚園、図書館などからの依頼に応じて外部に向けて「おはなし会」などのサービスを提供している。この点でこの群は、対外志向である。また、この群のサークルは、素話やパネルシアターなど、共通の特技を持ったメンバーで構成され、サービスにはその特技が生かされている。特技に基づき、専門的なサービスが提供されている点で、このサークルは、個別供給志向である。加えて言えば、サービスの提供においてそれぞれの技の器量が問われるために、この群のサークルでは、メンバーに、自らの技を極めていくことが期待されている。つまり、サービス提供の目的に着目すると、この群のサークルでは、メンバーは、自分の特技をスキルアップさせるという目的をもっている。また、サービスの提供を通じてそれを対社会的に表現することで「社会参加」を行い、そのことにより自己実現を図ることを目指している。これらの点で、この群のサークルは、自己充足志向である。しかし、その一方でこの群のサークルでは、対外的に素話やパネルシアターなどのサービスを提供する

ことで、地域の子どもたちの心の成長を促すことを目指している。子どもたちに、楽しさや喜び、悲しみなどの経験を与えることで、彼らの育ちを支援していこうとしているのであり、この群のサークルは、その点で、社会効果をも志向している。つまり、この群のサークルでは、目的が自己充足志向と社会効果志向を混合した形になっている。

このような特徴をもつサークルは、地域の子どもたちに文化的経験を提供するサークルである。その点で、この群のサークルを「文化経験提供型」と称しておく。

＊第5群（ケース23～26）：「きっかけ提供型」

5つめの群は、サービスの対象が対外志向、目的が社会効果志向、方法が協同産出志向であるサークルである。例えば、母親同士の交流・情報交換の場であるケース26がこれに該当しているが、その主催者であるIさんが、「毎回だいたい14～15組の親子が好きな時間に来て、好きな時間に帰っている」と語っているように[2002.05.22]、この群のサークルでは、誰でもが自由に参加できるようになっている。つまり、サービスの対象は、対外志向である。また、聞き取り調査によれば、この群のサークルは、集まってくる親子が活動を通じて結果的に互いに結びつき、地域に馴染むことになれば……という趣旨も含めて結成され、活動している。この点には、転入者が多いというX市の特性も関係している。いずれにしても、この群のサークルは、子育ての問題の社会的解決を目指している点で、社会効果志向である。さらにこの群のサークルは、今も述べたように、集まってくる親子を相互に結びつけることをねらいとしており、主催者は、その場に集まった参加者をできる限り巻き込みつつ、活動を行っている。つまり、サービス提供の方法において、この群のサークルは協同産出志向である。

以上のような特徴をもつこの群のサークルは、活動への参加をきっかけに、参加者が互いに知り合い、地域に馴染むことをねらいとするサークルであり、そうしたきっかけの提供が、サークルの主たるサービスとなっている。そこで、

この群のサークルを、「きっかけ提供型」と呼ぶことにする。

＊第6群（ケース27～28）：「ライフ・スタイル提案型」

6つめは、サービスが対外志向、社会効果志向、個別供給志向／協同産出志向混合という場合である。この群のサークルでは、育児情報誌の発行や、遊びについて考えるワークショップなどが行われている。広く子育てに関わる人々に情報やイベントを提供している点で、この群のサークルは対外志向である。サービスの方法に着目すると、情報誌の発行やイベントの企画には、主に専従メンバーであるスタッフが関わっており、そこではメンバーの能力や特技が不可欠なものとなっている。その点で、サービスは、専門的な立場から提供されている。一方、実際のイベントでは、行政に携わる人々や文化型のサークルなど他のサークルの人々、さらにはこの種の活動に関心を持つ人々（ボランティア）が参加し、ともにサービスを生み出すことが行われている。また、情報誌を企画したり、情報を収集したりする場合、専門的な立場に固執することなく、広く読者や地域の企業の協力を仰いでいる。つまり、この群のサークルは、個別供給志向と協同産出志向を併せもつ形で、サービスの提供を行っている。さらに、こうしたサークルにおいて特徴的なのは、それがある種のライフ・スタイルを提案するねらいをもっていることである。例えば、ケース27のサークルでは、情報誌を通じて母親向けに、子育てをしながらも自身の生活を充実させる生活の仕方の提案を行っている。あるいは、地元のレストランに対して、乳幼児連れの母親が外で食事をしやすい店づくりの提案を行っている。さらには、地域の環境問題に関心を向けるような試みも行っている。このように、この群のサークルは、人々に、これまでとは異なるライフ・スタイルを提案し、子育ても含めて社会の課題を解決しようとしている点で社会効果志向である。

こうした特徴から、この群のサークルは、「ライフ・スタイル提案型」とでも言えるものであり、ここでは、この名称を付しておくことにす

る。

以上、X市の子育て支援サークルを、それが提供するサービスに着目しつつ6つの群に整理し、その特性を示してきた。本節の最後に、この知見を踏まえつつ、それぞれの群が、X市のサード・セクターによる子育て支援内部に、どのように位置づいているかをまとめてみたい。まず、「教室提供型」のサークルは、X市の子育て支援としては、最も私化（プライベート）された位置にある。この型のサークルは、メンバーの自己成長や自己実現を促すことを目的として、それを専門的なサービスに託している。その点で、地域との関係からみると、比較的、閉ざされたサークルであり、地域との距離も離れている。そのために、その活動も「地域性」に欠けている。

次に、「交流提供型」と「きっかけ提供型」のサークルであるが、両者ともに、地域とのかかわり合いを重視している点で「教室提供型」とは異なっている。ただ、両者を比べると「交流提供型」よりも「きっかけ提供型」の方が、サービスの対象も広く、外部に対して開放的であり、より強く「地域性」が意識されている。さらに、両者ともに、子育ての仲間づくりや人間関係づくりを志向している点で共通している。また、活動の方法についても、メンバーが協働して活動を進める点において共通している。仲間づくり、人間関係づくりを、協働して活動するなかで行う点で、両者とも、共同体的性格が強く、子育て支援という点では、インフォーマル・セクターに近い位置づけにある。

「交流提供型」や「きっかけ提供型」のサークルよりも、さらに地域とのつながりが強いのが、「文化経験提供型」と「ライフ・スタイル提案型」のサークルである。「文化」と「ライフ・スタイル」と、提供・提案するものこそ違うものの、両者ともに、地域の子育てを、直接、支援する役割を果たしている。また、それゆえに、公的セクターが提供する支援も含めて、地域で展開する他の子育て支援との関係を保っている。場合によっては、公的な施策に参加・提言する立場に位置することもある。ただ、両者を比べ

てみると、「文化経験提供型」のサークルは、メンバー自身の自己成長や自己実現をもねらいとしており、その点で「ライフ・スタイル提案型」のサークルに比べて内向的である。

地域との関係からみて、他の型と、若干、異なる位置にあるのが、「教育主張型」である。この型のサークルの場合、望ましい、あるいは新しい子育ての在り方を社会に対して主張する一方で、実際のサービスの対象はサークルのメンバーに限られており、その点でアンビバレントな位置にある。「ライフ・スタイル提案型」のように、何らかの提案を地域に対して行ったり、場合によっては公的な施策に参加・提言する立場に立ったりするものの、活動の主要な部分はさほど開放的ではない。見方によっては、その在り方は、「共同体」的ですらあり、「交流提供型」に類似した側面ももっている。

5. 地域における子育て支援サービスの布置状況と今後の課題

以上、本研究では、X市の子育て支援サークルを対象に実施した質問紙調査および聞き取り調査の結果をもとに各サークルの活動特性を明らかにし、サークルが提供するサービス全体におけるそれぞれのサークルの位置づけを探ってきた。また、その前提として、これらのサークルが、地域における子育て支援全体のなかのポジションを探ってきた。

次に、X市の子育て支援全体を俯瞰するなか各サークルを位置づけ、サークルを中心にしたX市の子育て支援サービスの布置状況を描いておく。なお、その際考慮すべきことは、ここで取り上げた子育て支援サークルが、サード・セクターに属している点である。サード・セクターは、他のセクターと重なり合った関係にある。そのため、サード・セクターにおけるサービスの担い手は、当該セクターにおけるサービス提供の原理である「ボランティア性」に加えて、他のセクターにおけるサービス提供の原理である「共同性」（インフォーマル・セクターの場合）や「私益性もしくは市場性」（民間営利セクターの場合）、「公共性」（公的セクターの場

合)をもっており、その点で混合的な性格である(Evers, A. 1995, 渡辺 2002)。各サークルを地域における子育て支援全体のなかに位置づける場合、このサード・セクターの混合的な性格を視野に入れることが必要である。

図1は、この点を考慮しつつ、子育て支援サークルを中心に、X市の子育て支援サービスの布置状況を示したものである。この図をもとに、各サークルの位置づけを説明しておく、「ライフ・スタイル提案型」のサークルは、公的な施策に参加・提言する位置に立つこともある点で、公的セクターともっとも近い関係にある。

「交流提供型」のサークルは、共同体的性格が強く、機能的にもインフォーマル・セクターのもつ子育て支援を補完しており、当該セクターと重なり合う位置づけにある。「きっかけ提供型」のサークルは、「交流提供型」のサークルの機能を地域社会全体に広げていこうとする志向をもち、「交流提供型」のサークルよりも、ややインフォーマル・セクターから離れたところに位置している。「教育主張型」のサークルもまた、サークル自体が共同体的な性格をもち、その点でインフォーマル・セクターに近接している。ただ、この型は、施策的な方針に対して「オルタナティブ」な主張をしている点で、公的セクターにも近接しているが、公的セク

トとの関係はやや緊張関係にあると思われる。

「教室提供型」のサークルは、先にも述べたように最も私化された性格をもち、メンバーの「私益性」を追求している点で、民間営利セクターと重なり合う。「文化経験提供型」のサークルは、メンバーの自己成長・自己実現をねらっている点で、私化された側面をもつものの、その一方で、「読み聞かせ」や「パネルシアター」など、地域に対する文化的な貢献を行っており、公的セクターの子育て支援を補完したり、あるいはそれに施策提言したりする役割を果たしている。その点で、この型のサークルは、公的セクターと民間営利セクターとの中間に位置していると言える。

以上、サード・セクターである子育て支援サークルを中心に、他のセクターとの関係を視野にいれつつ、X市の子育て支援サービスの布置状況を描いてみた。ここで改めて、こうした作業の意義を述べておけば、第一に、こうした作業によって、社会サービスとしての子育て支援の「供給体制の構造」が明らかになる、という点である。地域における子育て支援サービスは、担い手の点でも、対象の点でも、内容や方法の点でも多様化してきている。セクター間において、あるいは、それぞれの担い手の間で、複雑な関係も生まれてきている。そうした点で、も

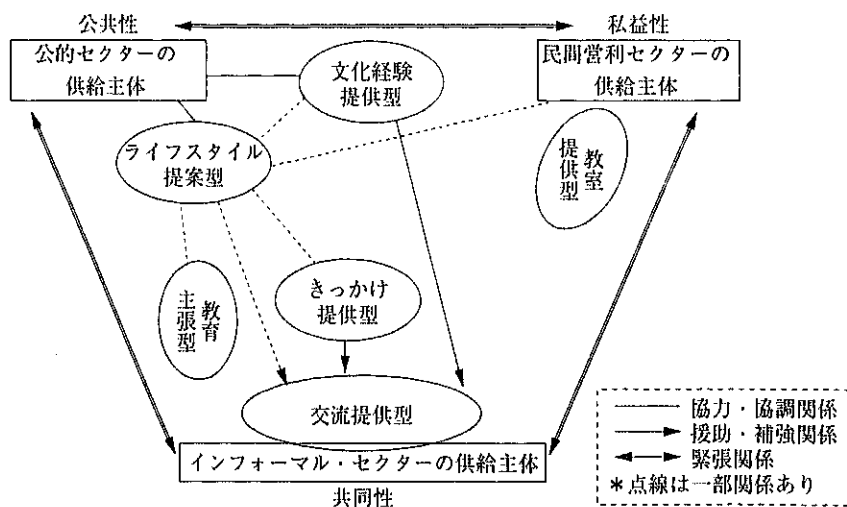


図1 子育て支援サークルを中心にしたX市の子育て支援サービスの布置状況

はや、個別的な把握では捉えきれない側面を持ちつつある。この点は、社会政策として地域の子育て支援を行う上での問題でもある。多様化し、相互に関係し合う子育て支援を、全体として把握し、その中で何を優先すべきかを決定する役割が社会政策にあるとしたら、支援の「供給体制の構造」の把握は不可欠のものとなってこよう。裏返して言えば、サービスの布置状況を描ければこそ、現在の子育てに関わる支援のサービスの問題点や課題が見えてくるということでもある。そこで、本研究で得られた知見をもとに、X市における子育て支援サービスの課題を示しておきたい。

その第一は、「交流提供型」のサークルに関わる課題である。具体的には、この種のサークルにインフォーマル・セクターによる支援の代替を期待することである。親族や近隣など、インフォーマルな関係による子育て支援が得られなくなっている今日、その欠落する部分をどのようにするかは大きな課題である。先に見てきたようにX市では、「交流提供型」のサークルが、サービスの対象が専業主婦である親に限られてはいたものの、インフォーマル・セクターに近接する位置で、子育てサービスを提供していた。とするならば、欠けつつあるサービスを、こうしたサークルに代替させるのも、一案であると思われる。

第二は、「交流提供型」のサークルと他の型のサークルとの間に、援助・補強関係をより密接な形で築くことである。X市では、「交流提供型」のサークルに接合するようして「文化経験提供型」「ライフ・スタイル提案型」「きっかけ提供型」のサークルが位置していた。「交流提供型」のサークルが活動する際に、例えば「文化経験提供型」のサークルが「おはなし会」や「パネルシアター」を開いたりして援助していた。「ライフ・スタイル提案型」のサークルは、会の情報を子育て中の親に“流す”役割をしていた。「きっかけ提供型」のサークルも、参加者を「交流提供型」のサークルへ仲介する役割を果たしていた。そして、こうした援助・補強関係が、全体としてX市における子育て支援サー

ビスを豊かにしていた。とすれば、こうした援助・補強関係をより強固なものとするのが、X市における子育て支援で課題となろう。

第三は、サード・セクターにある幾つかの子育て支援サークルと公的セクターにある関係諸機関との間に、施策の決定や実施をめぐる協力関係を築くことである。X市では、子育て支援サークルのうちの幾つか、特に「ライフ・スタイル提案型」や「文化経験提供型」のサークルが、公的セクターとの関係において、施策の提案・決定に参加しうる位置を占めていた。加えて、サード・セクターは、公的セクターよりもインフォーマル・セクターに近く位置し、このセクターに属するサークルは、より、子育ての当事者たちに近いところで、そのニーズや生活課題を汲み上げ、活動を行っていた。そこで必要となるのが、サード・セクターにあるサークルと、公的セクターにある関係諸機関の協力関係である。もし、このような関係がつけられたならば、子育ての当事者たちに近いところのニーズや生活課題が公的セクターに伝わる可能性も高くなるであろう。

第四は、サード・セクター内の担い手同士をつなげるネットワーク的なサークルをサービスの供給体制のなかにつくることである。X市におけるサービスの布置状況を見ると、「ライフ・スタイル提案型」のサークルが、情報の収集と発信を通じて、一部、そうした役割を担いつつあった。ネットワーク的なサークルは、他のサークルからのニーズや課題を集約し、それらを他のセクターに仲介するところに位置するものである。加えて、そうしたサークルは、ニーズの充足や課題の実現を目指す試みにおいて、コーディネーター的な役割を果たすものである。子育て支援に関するサークルが多様な形で作られ、公的セクターや民間営利セクターも多様な形のサービスを提供しつつある今、サード・セクターのサービス全体はもとより地域のサービス全体を見渡しながら、サークルのサービスを統括し、それを他のセクターにつなげていくネットワーク的なサークルが、X市においても今以上に必要とされるものと思われるの

である。

研究面での今後の課題にも触れておきたい。本研究では、子育て支援サークルに焦点を当て、そこを中心に地域における子育て支援サービスを俯瞰した。調査研究の対象も、子育て支援サークルのみであった。しかし、社会サービスとして地域における子育て支援を捉えた場合、サークルのみならず、公的セクターや民間営利セクターにおける個々の担い手をも取り上げ、研究の俎上に載せる必要があろう。また、そうしたセクター・担い手を中心に、地域における子育て支援サービスの布置状況を描写する必要もあろう。研究の対象を地域全体に広げ、多様な視点から、サービスの布置状況を把握することが不可欠である。その点で、本研究は、研究全体の端緒にすぎない。子育て支援の「供給体制の構造」を解明するためには、こうした課題を、なお、追求することが求められる。

注

- (1) 社会保障と同義語として捉えられることもあるが、社会サービスは、日本の現行制度である社会福祉・社会保障制度よりも広く捉えられ、所得・住宅・雇用・教育などの保障が含まれる(日本学術会議社会福祉・社会保障研究連絡委員会 2000, 伊藤 2001)。また、社会サービスは、社会保障に比べ、特定の問題を抱えた人々に対するサービスに加え、広く一般の人々がライフステージ毎のニーズに応じて利用できるサービスであるという理念を持ち、利用者の立場を明確にしている点に、特徴がある(伊藤 2001)。
- (2) ちなみに、社会サービスの供給主体の区分に関しては、Evers, A. や Pestoff, V. A. の他にも多くの論者によって論じられているが、その際、それぞれがいろいろに呼ばれており、呼び方が定まっていない。例えば、「国家セクター」は「公的セクター」と、「市場セクター」は「私的セクター」や「民間営利セクター」と、「サード・セクター」は「NPOセクター」や「ボランティア・セクター」など呼ばれることがある(佐藤 2002, 田尾 2002)。

- (3) 本稿では「子育て支援サークル」を、「子育てサークル」を含めた子育て支援に関わるグループ・団体・特定非営利活動法人の総称として用いる。これは、社会サービスの視点から子育て支援を捉えるならば、「子育てサークル」もまた遊びの実施や情報交換などを通じて、メンバー相互に支援し合っている点に目を止めることができるためである。
- (4) 著者は、これまでサード・セクターに焦点をあて、その供給主体の果たす役割と活動基盤に関心を持ち研究を行っている。その中で、国際協力分野の市民活動団体(NGO)を取り上げ、その組織特性や活動の基盤に関する研究を行ってきた。本稿は、同様にサード・セクターに位置づき、地域社会において活動している子育て支援サークルを取り上げ、その特性や役割を見ていこうとするものである。
- (5) 本稿のデータは、筑波大学教育社会学研究室の調査研究「地域における子育て支援サークル」に依拠している。
- (6) ただし、本研究ではサークルの特性を明らかにするため、同一形式をとる幼児クラブ(ケース1~5が該当)は、一部のみ調査対象として取りあげた。
- (7) この調査は、X市エンゼルプラン策定委員会が「〜聴こう子どものこえ〜X市エンゼルプラン」(1988)を策定する際に実施した調査である。有効回答者数は1,237名。
- (8) X市子育てサポートセンターの資料によれば、平成13年度における当センターのサービスの利用理由では、親の就労に関するものが53.5%を占めていた。

引用・参考文献

- Evers, A. 1995, "Part of welfare mix: the third sector as an intermediate area" *Voluntas* 6:2, pp. 159-182.
- 石原栄子 1999, 「子育て支援活動ネットワークー地域における子育て支援活動の実態分析ー」『作新学院女子短期大学紀要』第23号 181-193頁。
- 伊藤淑子 2001, 『現代日本の社会サービス』日本

- 経済評論社。
- 木脇奈知子 1998,「子育てネットワークに関する考察—子育てサークルの類型と今日的課題—」『家族関係学』No17, 13-22頁。
- 木脇奈知子・大山治彦 1998,「地域における子育て支援—大阪府K市における行政と市民ネットワークの事例研究から—」『家庭教育研究所紀要』No.20 137-147頁。
- 子育てサークル研究会(国立女性教育館内) 2001,『子育てサークルの活動に関する調査報告書』。
- 厚生労働省 2002,『少子化対策プラスワン—少子化対策の一層の充実に関する提案—』。
- 中野洋恵 2001,「子育てサークルの持つ意味と課題『子育てサークルの活動に関する調査より』」全日本社会教育連合会編『社会教育』第56巻9月号, 20-23頁。
- 日本学術会議社会福祉・社会保障研究連絡委員会 2000,『社会福祉・社会保障研究連絡委員会報告 社会サービスに関する研究・教育の推進について』。
- 小栗正裕 2001,「コミュニティにおける子育て支援活動に関する基礎的研究—コミュニティ意識を中心に—」『聖和大学論集』29号A 213-226頁。
- 学坂恵美・松原勝敏 2001,「高松市内の子育てサークルの実態に関する研究」『高松大学紀要』No 36, 93-105頁。
- Pestoff, V. A. 1992, "Third Sector and Co-Operative Services — An Alternative to Privatization" *Journal of Consumer Policy* 15:21 pp. 21-45.
- 真田是 2002,「ソーシャル・サービス」社会福祉辞典編集委員会『社会福祉辞典』大月書店 348頁。
- 佐藤慶幸 2002,『NPOと市民社会—アソシエーション論の可能性—』有斐閣。
- 白石淑江 1997,「子育てネットワークづくりに関する研究—名古屋市及びその周辺地域の実態調査から—」『同胞大学論叢』第76号 67-85頁。
- 武川正吾 1999a,「社会サービス」庄司洋子・木下康仁・武川正吾・藤村正之『福祉社会事典』弘文堂 417頁。
- 武川正吾 1999b,「福祉社会の社会政策」法律文化社。
- 田尾雅夫 1999,『ボランティア組織の経営管理』有斐閣。
- 筑波大学教育社会学研究室 2003,『地域における子育て支援サークル—事例に見る特性と活動の基盤—』。
- 八木成和 2002,「子育て支援に関する最近の研究動向をめぐって」『四天王寺国際仏教大学紀要』人文社会学部 第34号 291-302頁。
- 渡辺恵 2002,「市民活動団体における社会構築学習の分析枠組み—組織活動を通じた団体成員の学習—」『教育学系論集』第26巻 筑波大学教育学系 45-58頁。

Activity Characteristics of Groups Supporting Childcare in Communities: as a “Social Services” Providing Actor

Megumi WATANABE

Recently, cases where parents are experiencing problems related to childcare have increased, while declining birthrates are also creating serious social consequences. To solve these problems, not only the public sector, but also various voluntary groups and profit organizations have begun providing services within a community. Especially, volunteer groups have taken on important roles in the support of childcare within a community. Therefore, this paper aims to make clear positioning - that is characteristics and roles- of groups supporting childcare by reviewing childcare support within a community. To analyze this subject, “social services” were applied as a central point in this paper since the concept of “social services” implies a series of services provided by various and multiple actors to fulfill welfare needs for all people. Additionally, I used two sources of data from a questionnaire of 28 groups supporting childcare and interview surveys of 20 groups in X-shi.

I analyzed the positioning of total groups in total childcare support within a community from a point of view of social services. The resultant findings indicated that through a relative comparison with the public sector, groups in total assumed the role of providing assisted learning or education of children and mothers who are full-time housewives. Then, I analyzed the positioning of each group by using a framework of characteristics in services provided (inside / outside orientation of target, collaborative-producing / individual-supplying orientation in the manner of activities, and self-fulfillment / social-effect orientation in purpose). In sum, groups in X-shi were divided into 6 types — a) providing exchange, b) providing opportunities, c) providing learning classes, d) providing cultural experience, e) insisting in the ways of childcare, f) presenting alternative ways of life.

Finally, based on those findings, I clarified the mutual relations among groups supporting childcare and other sectors within a community from a point of view of social services, and explored problems in building a support system for childcare within a community based on multiple and various actors.